

聖書：ガラテヤ 5：13～18

説教題：自由と愛の律法

日時：2013年6月9日

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」（5章1節） クリスマンとは「自由」の祝福に入れられた人たちです。それはどんな自由でしょうか。それは救われるために良い行ないをしなければならないという束縛からの自由です。神に受け入れられるために点数稼ぎをしなくてはならないという圧迫からの自由です。キリストは私たちに代わって律法の要求を全部満たしてくださいました。罪については、私たちの身代わりに十字架についてすべての代価を払ってください、義については、地上の生涯で私たちの代わりに律法の要求を完全に満たす歩みをささげてくださいました。このキリストへの信仰によって、私たちは罪を赦され、完全な義を頂いて、大胆にすべての祝福の源なる神に近づき、交わることができる神の子どもたちとされました。

しかしこの「自由」は誤解されやすい教えでもあります。クリスマンは自由だからと言って、今や何をしても良いのでしょうか。これは自分がしたいことは何でも行なって良いという放縦を許可する教えなののでしょうか。パウロはそういう教えを宣べ伝えていると批判されてもいました。そこで彼はその誤解を取り除くために、ここでキリスト者の自由の正しいあり方を示して行くのです。

まずパウロが述べていることは、この自由はどのように用いられるべきか、ということについてです。13節：「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」 「肉」とは私たちの罪深い性質、墮落した人間性を指す言葉です。この「肉」は、救われたクリスマンの中にも残存し、隙あらば機会を見だし、自分を主張しようとしています。そんな肉にとって、「自由」というキリスト教の教えは非常に都合が良い。自分は自由なのだから、何かに捕らわれたり、制限される必要はないのではないか。今や私がしたいと願うことは何にも妨げられずに行なって良いのではないか。ここの「機会」という言葉は軍事用語であり、「そこから攻撃を始める場所」という意味です。つまり私たちの墮落した性質は、キリスト者の自由というこの教えをきっかけとして働き出そうとする。しかし罪の生活に進んでしまったら、元も子もありません。ヨハネ8章34節：「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」

ではキリスト者の自由とはどのように考えられるべきでしょう。それが13節後半にあります。すなわち「愛をもって互いに仕えなさい」ということです。ここにクリスマンの自由とは自分のしたいことを貫く自由ではなく、隣人に仕える自由であることが示されています。自分のために生きるという生き方なら、私たちは救われる以前も

して来ました。他の人のためよりも自分を優先して生きて来ました。しかし私たちは今やキリストにあって、私たちのことを誰よりも深く心にかけてくださる神を知りました。神は私を尊い御子をささげるほどに愛し、すべての祝福を備えてくださっています。そのことを知る私たちは、もはや自分のためではなく、私を救ってくださった神に喜ばれることのために、自分の人生をささげたいと思います。その神に喜ばれるあり方とは、愛をもって他者に仕えることなのです。ここで「仕える」と訳されている言葉は「奴隷」という意味の言葉です。自由について語っているのに、パウロは奴隷という言葉を使っています。一見矛盾しているかのようです。しかしここに真理があります。すなわち神の御前で真の自由を知っている人は、率先して他者の益に仕える奴隷になることができる。ルターは有名な「キリスト者の自由」という著作の中で言っています。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、誰にも従属していない。その一方キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、誰に対しても従属している。」パウロも1コリント9章19節で言っています。「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」

果たして私たちは神が導き入れて下さった自由をどのように用いているのでしょうか。私たちの自由は、他者の益に仕えることにおいてこそ発揮されるべきです。もちろん嫌々、渋々ではなく、愛をもって自発的に喜んで行うところに真の自由を体験するのです。

ではなぜ私たちはこのように歩むべきなのでしょう。その理由が14節にあります。「律法の全体は、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです。」ご存知のようにイエス様は律法を二つにまとめられました。一つは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」もう一つは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」パウロは第一の戒めには触れずに第二の戒めだけ取り上げて、これで律法全体は全うされると言っていますが、これは第一の戒めを無視したり、軽んじているからではありません。ここでは人間関係について扱っているからです。

パウロがここで言っていることは一見面白いことです。彼はこれまで繰り返し、クリスチャンは律法から解放されたと言ってきたのではないのでしょうか。再び律法の奴隷にはなるな、と言ってきたのではないのでしょうか。確かに私たちは救われるために律法を守り行なう必要はありません。しかしそのことは、律法はもう投げ捨てて良いということの意味しません。律法は神ご自身を映し出す道德の基準であり、これが取り消されたり、撤回されることはあり得ないのです。それでは神がご自身を否定することになります。私たちは救われるためにこれを守る必要はないのですが、救われた者として、その感謝を律法を守り行なう生活に現わすのです。またそのように歩むことが私たちにとっては救いを意味します。私たちの救いは単なる罪の赦しだけでなく、やがて天国に住む者としてきよめられることも含みます。そのための指針となるものがこの律法です。この律法に沿う歩みを通して、私たちは神ご自身に似る者へと造

り変えられて行くのです。

果たして私たちはこの大きな目標を見据えて、自分に与えられている自由を用いる者でしょうか。残念ながらガラテヤ人たちはそうでなかったようです。15節：もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。」 互いにかみ合ったり、食い合ったり・・・これはジャングルで猛獣同士が戦い合う姿を表す言葉です。その結果は何でしょうか。お互いが滅ぼされるということです。互いが攻撃し合い、傷つけ合い、誰も勝利者がいない。両者がズタズタに傷つき、サタンが喜ぶだけ。大事なことはクリスチャンは真の自由を持っているということだけでなく、その自由をどう用いているかということ。私たちの前に置かれているのは律法を全うする歩みです。その大きな目標に向かって、与えられている自由を喜んで他者の益のために用いる歩みに発揮して行くように、とされているのです。

果たして私たちにこのような歩みができるのでしょうか。パウロはそのためのカギについて16節以降で語ります。それは「御霊によって歩め！」ということです。ガラテヤ人は互いにかみ合ったり、食い合ったり、まさに「肉」に突き動かされている生活をさらけ出していました。私たちもともすると同じことをしかねません。肉に機会を与えないように、と願いつつも、気がついたら肉が暴れ出してしまっていることがあります。どうしたら良いでしょうか。パウロは言っています。「御霊によって歩むなら、決して肉の欲望を満足させるようなことはない」と。17節：「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。」 「肉」と「御霊」は互いに対立しています。これらは互いに相容れないものであり、仲良く共存できません。ですから私たちがもし肉に勝利したいなら、御霊によって生きることに専心すれば良い。肉に負けないように、肉に負けないようにと注意するだけでなく、積極的に御霊に従って生きるなら、肉の欲望を遠ざけ、その誘惑を撃退することができるのです。

17節後半はどういう意味でしょうか。「この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」 一見これは、御霊と肉の力に翻弄されて、私たちは思い通りの生活ができない、不本意な生き方しかできない、と言っているように見えます。しかしそれは16節のパウロの強い主張と一致しません。パウロは御霊によって歩むなら、肉に打ち勝てると言い切っています。では17節後半はどういう意味でしょうか。これは御霊と肉は互いに正反対へと引っ張る力であり、これらから離れて私たちは自分のしたいと思うことをすることはできないということでしょう。私たちは必ずどちらかの影響を受けるのであって、その間の中間に行く歩み、中立の歩みはないということです。とするなら私たちはどうすべきでしょう。それは御霊によって生きることを選び取るということです。18節：「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」 御霊によって導かれるなら、以前の律法の下にあった時とは異なる新しい力、新しい恵みの下で生きることができるのです。

具体的に御霊によって生きるとはどうすることでしょうか。それはまず御霊が自分の内に住んでいて下さることを認め、感謝し、信頼することでしょう。あるいは御霊を頂いているのに、そのことを認めず、無視し、このお方を悲しませる歩みをして来たことを悔い改めることでしょう。エペソ書に「神の聖霊を悲しませてはいけません。」とあります。この方が贖いの日に向かって一生懸命働いて下さっているのに、それにも留めず、無視しているなら、この方は当然悲しみます。そのことを悔い改め、「この方によって歩みたい」という願いを御霊に告げ、祈ることでしょう。

また御霊の働きを豊かに受けたいなら、日々聖書に聞くことに向かわなければなりません。御霊の心は聖書に記されています。私たちは自分に与えられた思いが御霊からのものなのかどうかを判別するためにも、聖書に聞くことが必要です。そしてさらに御霊の促しに祈りつつ従うことが必要です。御心を知る時だけでなく、それを行なうにあたって、御霊が力を与えてくださるように祈り求める。そのようにして私たちは人間の知恵と力によるのではなく、御霊の上からの知恵と力によって歩むことへ導かれるのです。

本日の説教題は「自由と愛の律法」とつけましたが、本当は「キリスト者の自由と愛の律法」としたかったものです。心に留めたいのは、私たちはキリストにあって頂いた自由をどのように表すべきかということ。その自由は自己主張したり、互いにかみつ়くためではなく、互いに仕えるため、そして愛の律法を全うするためのものです。そのために聖霊なる神が助けてくださいます。私たちは御霊が共にいてくださることを感謝し、御言葉に耳を傾け、この方の導きを祈り求めたい。そして御霊に導かれて愛の律法を全うする歩みへ進み、そこに私たちの神に対する感謝を現わし、また救いの完成へ向かう道を日々前進したいと思います。